

## 第2章 決断と行動の原理

### 1 行動のみが未来を開く

優柔不断は諸悪のうちの最大の悪である。(デカルト)

#### ——幸福は行動の中にある——

多くの賢人、哲学者が繰り返し繰り返し行動することの大切さを説いている。

哲学という思弁的学問に従事し、実務家ほど大胆であったとも思えないデカルトさえ、「優柔不断は最大の悪である」と断言している。アランは、「臆病者は最初の舵の動かし方で航海が最後まで左右されてしまうと考える」と皮肉っている。

道元は思ひたたら直ちに修業することの大切なことを弟子に懇々と諭しているが、これはお坊さんの修業についてだけでなく、広く人間の生き方に当てはまる。

仏道を学ぶ者は今日直ちに修業を始めるべきである。持病があるから病気を治してから修業しようと思うのは間違いである。人間の身は仮の姿であるから病気がないということはない。修業こそ一生の大業と思い、命のあるうちに究めようとその日その時を無駄に過ごさず修業すべきである。

病気ならもっと重くならないうちに修行を行ない、重くなったら死なぬうちに修業を行うべきである。

修業するための部屋や袈裟を取りそろえたうえで修業しようなどと思つてはならない。必要な道具がなくても、死ぬ時は日々近づいているのであるから、直ちに修業しなければ一生を空しく過ごすことになる。

この道元の凄まじさはどうであろう。病気を言い訳にするなどといふ、重病なら死なぬうちに修業せよと説く。われわれ在家の者にとっても、使命のために賭ける気力はかくありたいものである。

フランスのモラリストで『幸福論』を著わしたアランは、皮肉まじりに「行動する人は幸福だ」という。アランは一見、皮肉を装っているが、ざっくりと人生の真実を切り取った言葉でもある。

わたしに言わせれば警視総監は最も幸福な人である。なぜなら、彼はいつでも行動しているからだ。やれ火事だ、水害だ、地滑りだ、死亡事故だ、喧嘩だなどなど。この幸福な人はいつも行動する必要に迫られている。だから規則や紙屑のような書類は関係なし。そんなものは役人に任せておき、本人は行動そのものである。直ちに行動すること、それが人間の生活を満たしてくれる。

毎日の生活は誰にとっても地味なものである。日々が喜びと感動の思いに満たされる生活などあり得ない。どんな富豪でも、スターでも、著名人でも、顔を洗い、髪を剃り、朝飯を食べ、歯を磨き、トイレに行き、シャワーを浴び、服を着替えるといった雑事に時を費やすなければならない。

このように、どんな人にとっても生活の大半は些事の連続である。だから平凡な日々の生活の中に熱中できるような事柄を見出し、日々ある種の達成感、充実感を感じられるなら、これは大いなる幸福である。不条理のまっただ中に生きる人間にとては、これこそが現実的な幸福であろう。

だから、アランの言葉は単なる皮肉ではない。行動中の精神の充実感、満足感はそれ自体行動の報酬である。たとえ結果がうまくいかなくても、行動する者は行動の過程において十分な報酬を得ている。このように、目的の達成よりもそれに至るプロセス(過程)と行動そのものを楽しむことが人生を楽しむコツである。

### ——燃えない人々——

決断と行動のみが未来を切り開く。だが、何と多くの才能のある人々が決断する勇気がないため空しい一生を過ごしていることか。

寒さや暑さを恐れ、風向きを恐れ、右顧左眄して何も行動しないままに幸福から見放されてしまう。そして結局は満たされることのなかった自分の一生を振り返って、呪いの言葉を吐きながら墓場へ送られるのだ。

多くの人々は今直ちになすべき決断を明日に延ばし、明日になればまた決断を先に延ばす。決断を延ばす理由を見つけるのは簡単である。まだ時期が熟していない、あまりに無謀だ、前例がない、うまくいくかどうか確信がない…。

しかし、これは自分から逃げるための言い訳にすぎない。どこに確実な成功など転がっているか。チャンスは運命の扉を3度叩かない。チャンスは危険と裏腹である。危険があるからこそ、成功の報酬も甘美なのだ。

要するに、何事にも慎重な人々は愚かで小心なだけだ。彼・彼女は行動こそが成功の母、幸せの母であることを知らない。彼・彼女は石橋を叩いてはみるが決して渡らない。たまには石橋を渡り始めるが、途中で引き返してしまう。そして「あの石橋は古いからひょっとしたら崩れ落ちるかもしれない」などと馬鹿な言い訳をする。

だが、臆病者にいくら行動の大切さを説いても実は無駄である。彼らは若い時にひどく失敗した経験があり、それが影響していることが多い。そして、いつの間にか些細な失敗も恐れる性格になってしまっている。

綱渡りの芸人は、一度綱から落ちると落ち癖がついてしまうという。「また落ちるのではないか」という悪しき想像が、体のバランスを崩してしまう。この悪しき考えに囚われると、綱から落ちるように筋肉が働いてしまう。

人間の神経は現実と想像の区別がつかないと言われる。「落ちるかもしれない」と想像すると、神経はその通りに作用して筋肉を動かし、結局また綱から落ちてしまう。

どんな場面でも、心の枠組みが行動を決めるのである。些細なミスも恐れるように、繰り返し繰り返しプログラミングされてしまっている人々は、いざ決断となると無意識に失敗を恐れ、決断を引き延ばし、結局は不幸のクジを引くことになる。彼らは、このような消極的な心の習慣を持った人生の犠牲者である。

だから、失敗のプログラミングをされた人々は、繰り返し繰り返し行動のプログラミングをして、悪しき心の習慣を捨て去らなければならない。行動こそが幸せをもたらすという人生の法則を念じて、過去の忌わしい失敗のプログラミングを脳から消去しなければならない。

### —小さな決断の積み重ねが人を大きくする—

『道は開ける』の著者デール・カーネギーはその方法を教えてくれる。

一度胸をつけるためには恐ろしくて手の出ないことに挑戦してみることだ。それを欠かさずやり続けて成功の実績をつくるのだ。些細な成功の実績を積み重ねることが、小心を克服するための最も確実な方法である。

さすがに、世界のミリオン・セラーの著者カーネギーだけあって、その教えは極めて実際的である。

小さくとも成功の経験は人をより積極的にする。2度、3度と小さな決断をして成功すると、思いがけない自信を得るものである。小さな成功の経験が人の性格まで積極的なものに変えてしまう。

ちょうどこれは筋肉の負荷トレーニングに似ている。上腕筋、大胸筋、背筋などの筋肉のトレーニングをする時は10キロ、20キロのような軽いバーベルから始める。軽いバーベルを毎日数十回持ち上げ、それを数ヵ月続けて次第に重量を増していく。最初から重いバーベルに挑戦すると筋肉を痛めたり、筋を切ったりしてしまう。

負荷重量を増やすごとに人はある達成感、満足感を味わうことができる。こうなると重いバーベルに挑戦することが楽しくなってくる。

この例から分かるように、カーネギーの一見、平凡な言葉は、実に千金の重みを持っている。だが、カーネギーの教えを意識的に実践している人はごくわずかであろう。多くの人々はある日突然大きなチャンスがやってくることを夢み、その時には大胆な決断と行動をするつもりでいる。だが、これは白昼夢にすぎない。日常の小さな決断さえできない者が、いざと

いう時になって大きな決断ができるわけがない。50 キロのバーベルしか持ち上げられぬ者が、ある日突然 100 キロのバーベルを持ち上げることはあり得ない。チャンスは偶然に向こうからやってくるものではなく、小さな決断と行動を積み重ねたうえでやっと呼び込めるものである。われわれは自昼夢を見てはならない。コツコツと地道に新しいことに挑戦し、それを通じて積極的態度を養っていかなければならない。

### ——未来は人間関係的に展開する——

多くの人が誤解していることだが、未来は人柄とか性格と無関係に生じるものではない。そうではなく、未来は個人の持ち味と深く関連して展開する。「未来は人間関係的に展開する」といえよう。

未来が人間関係的に展開するのは、ほとんどの場合、未来は他人を介してやってくるからである。つまり、自分と他人との接触の中から未来は生まれ出るものである。

ある事業を同じ時期に同じ規模で始めたとしても、A の始めた事業は不況にかかわらず利益を上げ、B の事業は破産に瀕する。この違いが生じるのは、未来はただ機械的に一律に到来するのではなく、人が創り出すものだからである。

だから、甲、乙、丙という 3 つの選択肢がある場合に、どれを選んだら最も有利かを客観的に予測することはできない。決定する人の性格、年齢、知性、人間関係、投下するエネルギー一量、運・不運、健康状態などによって未来はいくらでも変わることである。

回教の創始者であるマホメットの面白い話がある。ある日マホメットは信者に対し、「わたしはあの山を呼び寄せその頂上で信者のために祈りを捧げる」と予言した。そこで多くの人々が、マホメットの奇跡を見るために集まった。

「山よ動け」とマホメットは叫ぶ。だが山はびくともしない。何度か試みた後、山が動かないことを知るとマホメットは悪びれもせず山に向かつて言った。

山よ、おまえが歩んでこないならわたしがおまえの方へ歩んで行こう。  
そして、マホメットはすたすたと山の方に歩き始めた。

これを馬鹿なエピソードだと考えてはならない。興味深いのはこの出来事によってマホメットが信者の信用を失わなかつた点である。信者たちはマホメットのスケールの大きさ、人の度肝を抜く雄大な発想に感心し、かえって彼に愛着を感じたのである。

世の中とはこんなものである。普通、人が「山を動かす」などと言い出せば気違ひと思われるが、マホメットならばたとえ失敗してもそれがかえって良い結果をもたらす。このように、人の運命や未来はつねにその個人と密接に関連して生まれ、展開する。

世間は臆病者に辛く当たり、大胆なものにひれ伏す。

世間は、臆病な人には大胆な人にに対するよりも、いっそう苛酷である。犬は、犬を適当にあしらう人よりも、恐がる人にいっそう声高に吠えたて噛みつくものだ。

人間もこれと似ている。世間を恐れて進む場合にはあなたは世間の餌食になるだろう。だが反対に、あなたが大胆に進むならば、世間は結局あなたのなすがままにさせておくことになるだろう。

陽気に、大胆に、自然に行動すれば、あなたの行動がたとえ伝統に反するものであっても、世間は次第に大目に見るようになる。そしてあなたは段々特別な地位を獲得し、他の人間だったら許されない事柄もあなたには許されるようになるだろう。

(バートランド・ラッセル)

未来は創り出すものだから、客観的な条件が整ってから行動に着手しようとするのは愚かである。必要な条件が整ってから行動に移せることなどほとんどない。たいていは見切り発車をしなければならない。それが人生なのだ。だから見切り発車のできない人間は必ず未来を失うのである。

## 2 行動のメカニズム

**動かない船は操縦できない。(アンドレ・モーロア)**

### ——臆病は不運を招く——

バートランド・ラッセルは、「臆病な人間は、無謀な人間より不運にあう」と固く信じていた。慎重、優柔不断、臆病、これらはみな不運を招く。

仮に細い板の上を歩いていたとする。落ちるのを恐れる時の方が、恐れない時よりいっそう落ちる危険性が多い。同じことはわれわれの生活すべてに当てはまる。平気で物事に直面する人は、臆病に生活に立ち向かう人よりはるかに幸運である。

たまには恐れを知らぬ人間も災難にぶつかるかもしれない。だが、恐れを知らない人間は、臆病な人間だったら悲嘆にくれるような苦しい状況を、怪我もせずに通り抜けてしまうことが多い。

では、なぜ臆病は不運を招くのか。ラッセルは、それは心の問題と考えた。臆病な人はいつも心の底に不安感や恐怖を抱えており、小さな変化にも不安を感じ、本能的に逃れようとする。こういう人々の生活は極端に慎重になり、幼い日に歩き慣れたのと同じ道しか歩きたがらない。ちょっとでも脇道にそれれば、災害が降ってくるのではないかと本能的に恐れる。彼らは自分の堅い貝殻に閉じこもってしまう。だから、幸運がくるはずもない。

ところが行動的な人は、一般に漠然とした安心感や自信を持っている。勿論この自信にはい

いろいろある。ある者は山登りがうまいとか、水泳がうまいとか、楽器が上手に弾けるとか、いろいろの趣味を持つことにより自信を得るだろう。ある者は、漠然と自分はついているという意識を持つだろう。このような積極的な心の持ち方が行動の基本にある。

積極的な態度は、ちょうど滾々<sup>こんこん</sup>と湧きいでる泉のようなものである。絶えることなく溢れ出る水脈は小さな流れとなり、やがて母なる大河となって大洋に注ぐ。涸れることのない小さな活動源は、やがて大いなるものを生み出す。

同じように、絶え間ない行動の積み重ねは、一つ一つは小さなものであっても幾重にも積み重なってやがて大きな成功をもたらす。

小さな行動を絶え間なく積み重ね、小さな失敗と成功を繰り返し、やがて大きな成功がもたらされる。大きな成功を達成するには、必ずそれに至る小さな行動の積み重ねと、失敗が必要である。積極的思考態度があれば、小さな失敗を乗り越え、つぎつぎと新しい行動を起こすことができる。未来を志す者は、このような積極的思考態度を養成しなければならない。

だが、消極的な人は恐る恐る小さな決断をし、一度や二度失敗にあうと「やはりダメだ」と落ち込んでしまう。そして本当にダメになる。人生は成功の縦糸と失敗の横糸で織った綴れ織りのようなものだから、失敗がないことはあり得ない。いつも涸れることのない決断と行動を繰り返していれば、いつか必ず大きな綴れ織りを完成することができる。

### ——人生は短い決定的な行動からできている——

多くの人は慎重に考えれば良い決断ができると思っているが、これは幻想である。なぜなら、いくら熟慮したところで最後の決断は一瞬になされるからだ。行動するかしないか、その最後の決断はまさに一瞬に他ならない。

長い間考えればそれだけ良い決定ができそうなものだが、実はそうでもない。決断は一種の心理的勢いに乗ってなされるのであり、熟慮したかしないかはほとんど意味がない。人生の節目に飛ぶことができるか否かは理屈ではない。止むに止まれぬ勢いに乗って飛ぶのである。

この勢いに乗ることが成功の秘訣であり、理屈をこね回して飛んだところで、必ず途中で落下してしまう。行動の原動力を熟慮に求めてはならない。

人の一生の運命を決めるのは一瞬にすぎません。長い相談をしたところで最後の決断は瞬間に決められます。あれやこれや思い煩い、気持ちを乱してはかえって危険を増すばかりです。(ゲーテ)

人生はその大部分が短い決定的な行動から成っている。行動する時になって考慮しなければならないようではたいてい失敗するに決まっている。

行動に移る決定的瞬間には、心理的因素が極めて大きな役割を演じる。勇敢に事に

当たる者は決定的な勝利をおさめることができる。この勝利が長い間にわたって人の運命を決定する。これに反して、あやふやな態度で闘いに臨む者は降伏するか退却する他はない。

大きな決心や行動をするのさえ、ごく短い時間しか必要としないことが少なくない。だから、時間が足りないというだけで物事を延期してはならない。同じ機会はもう二度とこないことが多いからである。(ヒルティ)

何事も用意周到であるよりは、むしろ果斷なほうが良い。運命の神は女神であるから、彼女を征服するには打ちのめしたり突き飛ばしたりすることが必要である。運命は慎重な人より果敢な人に従順である。要するに運命は若者の友である。果敢で、荒々しく、大胆な者の友である。(マキャベリ)

ゲーテやヒルティのような生活の巧者も、マキャベリのような稀代の人間観察家も、あらゆる決断は一瞬になされることを明らかにしている。一瞬の決断に当たっては、熟慮したか否かはたいして関係なくある種の勢いが大切であると喝破している。

### ——森の中のデカルト——

哲学者デカルトは、その著書『方法序説』の中で有名な日常生活の法則について語っている。デカルトと言えば近代哲学の父と言われ、その物事を懷疑する徹底さにおいては並ぶ者がない。彼はこの世のすべての存在を徹底的に疑った。自分自身の存在も疑ったうえに、ついにあの有名な「我思う、ゆえに我あり」という根本原理を確立したのであった。

デカルトの『方法序説』と聞くと、食わず嫌いの人は何か高遠な哲理を語っているように誤解するが、何のことではない、生きる法則を語っているにすぎない。

その第2法則は、決断と行動の大切さをあますところなく物語る。

第2法則：日常生活においては、できるだけ心を堅固にし、迷ってはならない。ひとたび決断したからには疑いを抱かず、それが絶対に確実なものであると考えてあくまでその決心に従うべきである。

旅人が森の中で道に迷った時、1ヶ所に立ち止まっていてはならないが、逆にあちこちとさまよい歩いてもならない。絶えず同じ方向をめざして真直ぐに進むべきである。最初選んだ方向が偶然に選んだものにせよ、その決心を変えてはならない。ひたすら真直ぐに進めば、目的地に到着しないまでもいずれどこかに辿りつくであろう。それは森の中でじっと立ち止まっているよりははるかに良いことである。これと同じく、日常の生活行動も少しの猶予も許さない。いろいろな考えの中で、どれが最も正しいものか分からぬ場合にも、ともかくどれかに決定しなければならない。そしてひとたび決断した後は、それを眞実で確実なものとみなさなければならない。

意見を変える意志薄弱で気の変わりやすい人は、絶えず後悔したり良心の苛責に襲われたりする。そういうことがあってはならない。

デカルトの法則はあっけないほど簡単なものである。だが、簡単だからといって価値がないというわけでは勿論ない。いつもそうであるように、デカルトは考えに考え抜き、検証に検証を重ねてやっとこの法則に到達した。

デカルトは形而上学に興味があったばかりではなく、日常生活や健康の維持などの日々の実践に関する技術に関しても完全な認識を得ようと努めたのだが、この「森の中のデカルト」として有名な第2法則はその1つの成果であった。

### ——どこへ行くか誰が知ろうか——

繰り返しいうが、人間は決して未来を予測できない。大きな時代の流れは別として、個人の日日の行動の結果など誰も予測できるはずもない。われわれの運命の目的は不明であり、われわれはただ風に吹かれるまま生きる他はない。神は一人の個人の運命などに興味を持つほど暇ではない。

人の運命などどう転がるか決して分からぬのだ。善人が幸せな一生を送るとは限らず、悪人が不幸な一生を送るとは限らない。むしろ正しいか悪いかに関係なく、行動するか否かが幸せになるか否かの分かれ目である。

未来は不可知であるからあまり思い煩うことなく、思い切ってこの身を運命に委ねてしまうより仕方がない。

時は運命の軽車を引いて行く。覚悟を決めて手綱を取り、右や左の石や崖を避けて車を驅るより是非はない。どこに行くか誰が知ろう。どこから来たか誰が覚えていよう。(ゲーテ)

ゲーテのこの勇ましい言葉は、単なる机上の空論ではない。ゲーテは自分の日々の生活で遭遇した事件を観察・分析し、それを将来の生活に役立てるのに巧みだった。いわば日常経験派である。どんな些細な事柄からも、彼は生きる法則を学んだ。ゲーテは弟子のエッカーマンにこう話している。

最近わたしが気づいた1つの秘密を君に話しておこう。それは利口な行動が必ずしも好ましい結果をもたらすとは限らないし、愚かな行動が必ずしも悪い結果を生むわけではないということだ。むしろ愚かな行動がしばしば良い結果を生むことさえあるのだ。

わたしは出版社との交渉の際にある間違いをしてしまい、それを悔やんでいた。だが後になると事情が一変してしまい、かえって間違いをしたことが良い結果をもたらしたのだ。人生にはこういったことがよく繰り返し起こるものだ。だから生き方を心得ている世慣れた人は、実に大胆に、時には無謀と思えるほどに物事を処理

しているものだよ。

有限な人間がいくら全知の限りを尽くしても、しょせんその計らいには限度がある。因果の流れはあまりにも複雑に絡み合い、到底人の知り得るところではない。決断をしたら、後は運命に委ねてしまう他はない。

モンテーニュも、やり方がまずかったため幸運を取り逃したことがしばしばあった。だが、彼は自分の決断が間違いであるとは決して考えなかった。最善の決断をし、行動にててそれが失敗に終わったのは、運がなかっただけだと考える。運命には運命の領分があるのであり、人間はそれを犯してもならないし、運命が取り計らった結果に対して反省する必要もない。決断した以上はただ運命の馬車に乗り、行き先を委ねる他はない。

どんな決断も良い結果を招くか否かはすべて運次第である。万物は変転して止まないものだ。わたしも今まで何度も重大な間違いを犯したが、それは判断を間違つたからではなく、運がなかつたからである。

われわれを取り巻く事柄には、秘密の予測できない部分がある。わたしが結果を予測できなかったからといって、悔みはしない。わたしの知恵には限界があり、不測の運がわたしを打ち負かしたのだ。運が味方しないのならそれは仕方がない。わたしは自分の運のなさを責めても、自分のしたことを責めはしない。わたしはめったに後悔などしない。（モンテーニュ）

### 3 決断と実行

**運命の女神は勇者を愛す。（マキャベリ）**

#### ——時勢を読む——

臆病であるより大胆であるほうが良い。だが、大胆であることは衝動のままに行動することを意味しない。ただ盲目的、衝動的に行動する者は、臆病者と同様、誤りを犯すことになる。行動することは必要だが、時勢を読みながら、ある時は手綱を引きしづり、ある時はムチを入れて意気盛んに行動しなければならない。

稀代の人間観察家であつたマキャベリは語る。

ある君主が隆盛を極めているのに、あくる日には突然滅んでしまうことがよく起こる。それは時勢と共に自分の生き方を変えないからである。時勢も状況も変化したのに、君主が従来どおりのやり方に固執すれば彼は必ず衰える。大事業をなし遂げるには、時代をよく考え、環境に合わせなければならない。時勢に合わせることのできない者は生涯の大半を不幸のうちに過ごさなければならないし、何をして失敗に終わってしまう。これに反し、時勢に乗った人々はすることなすことうま

くいく。人の運、不運は時勢に乗った行動をするか否かにかかっている。

マキャベリは栄枯盛衰の絶え間ないイタリアの都市国家の歴史を丹念に分析し、時勢に合致した行動をする者のみが成功の果実を得ることを学んだ。

人生にも大きな時勢の転換期がおよそ 20 年ごとにやってくる。

20 歳には成人式を迎え、一人前になり、40 歳前後は男で言えば厄年に当たり、肉体的にも精神的にも無理がきかなくなり、60 歳には退職が待っている。

このような人生の 3 つの節目ごとに、人は精神的、肉体的、社会的に大きな転換期を迎えるのであり、当然ながら個人を取り巻く時勢も大きく変わってくる。

人生に立ち向かうにしても、青年時代は荒馬のように、中年時代は駿馬のように、老年時代は荷馬のように、それぞれの時勢に合わせて行動しなければならない。青年時代のやり方を中年時代にやろうとしても失敗する。同じように、中年時代に成功した方法を老年時代になって続けて続けても成功はおぼつかない。

このように人生の節目節目で自分を取り巻く時勢が変わることに気づかなければならぬ。そして物の見方、行動の仕方を人生の節目に合わせて再構築しなければならない。この秘密を知っている者は、人生により良く適応していくのだし、時勢が変わってもそれに気づかず昔の方法を繰り返す者は時勢に乗り遅れてしまう。

実に人生には大きな転換点があり、それぞれの時勢にふさわしい行動をしなければ必ず失敗する。この法則を知るだけで、人生はだいぶ過ごしやすくなる。

### ——痛切なる志——

決断するに当たって大切なのは、いろいろなことに手を出さず 1 つのことに専心集中することである。

何事によらず、成功しようと思うならその道を完全に修得することである。いろいろな分野に勢力を分散してしまうのをわたしは賢明だとは思わない。多くの事業に関与して成功した人に、わたしはほとんど会ったためしがない。特に製造業となると誰もいない。成功した人たちは、1 つの道だけを選んでそれに専念した人である。

機械の増設とか製造工程の改善によって利益を上げることができるように、それを怠り自分の領域以外のものに投資する人が多い。こうした投資から得られる最大の利益も、自分の事業を怠ったために生じる損失を償うには足りない。本当の金鉱は自分の工場に眠っていることを忘れてはならない。だから、わたしは終生自分の領域を固く守り、脇道にそれないように努めた。(アンドリュー・カーネギー)

自分の専門以外にあれこれと手を出すことの愚を、ゲーテも再三弟子のエッカーマンに戒めている。

今の大学を見ていると、やることが多過ぎるし役に立たないことが多過ぎる。昔なら薬理学の一部にすぎなかつた化学も植物学も、今では独自の広大な学問になってしまい、どの分野をやるにしても一生をかけないわけにはいかないから、あれこれとやつたところで毒にも薬にもならない。一方をやれば、他方は必ずおろそかになってしまう。

だから、賢明な人というのはあれこれと気を散らすようなことはいっさい退けて、自分を1つの専門に限定してそれに専念するのである。

自分の得意な分野に専心集中し、道を究めようとすれば余計なことに手を出す暇などない。興味を分散し、あれもこれもと手を出せば本業がおろそかになってしまう。

よくカラオケやゴルフなどプロ顔負けの人がいて、人から誉められて得意になっているが、これなども考えものである。本業以外はほどほどであれば十分なのであって、あまり余技がうま過ぎると必ず本業がおろそかになる。

それほど重要でないことにあまりに卓越していることは、もっと必要なことに向けるべきであった時間と勤勉さとを誤り用いた証拠であって、かえってその人の徳を損なう。だからアレクサンドロス大王が宴会の席上で音楽家にも負けないほど上手に歌った時、父王のフィリッポスは「おまえはそんなにうまく歌って恥かしいとは思わないのか」と注意したのである。(モンテーニュ)

時の流れは無情迅速であるからただひたすら仏道を修業すべきである。文章を作ったり、歌を詠んだりすることは何の役にも立たない。仏道を修業するのに手広くあれもこれもと学んではならない。ただ1つのことを行なうのさえ能力の劣った者には難しいのに、まして多くのことを同時になすことは間違いでいる。(道元)

われわれには無限の時が許されているわけではなく、時は物音も立てずに過ぎ去っていく。だからわれわれは急がなくてはならない。人生の大事を決断し、行動にとりかかったからには、あれこれと余計なことに手を出さず、ただひたすら1つの大事を思い定めてそれに集中しなければならない。痛切なる志をもって事の成就を熱望しなければならない。

そのためには師をも見捨て、親をも見捨てなければならない時さえある。

貞応2年(1223年)、道元とその師の明全は求法のため宋の国へ留学を計画した。だが、その直前になって明全の師の明融阿闍梨が病に伏し死期が迫った。

師の明融は明全を枕元に呼び、自分を看護し死後の菩提を弔った後に留学するよう明全を

かき口説いた。明全は弟子を集めて、留学すべきか留学を延期すべきかを相談した。道元や弟子たちは、留学を延期し師の最後をみとるよう勧めた。だが明全の意見は違った。

留学を中止してみても、死ぬと決まった病人の命が助かるわけでもない。またいくら看病しても病人の苦痛が止むわけでもない。看病も一時的な気休めにすぎないのだから、そういうことに心を煩わせることは無駄である。

それに比べ仏法を求める志を忘れれば、かえって罪業になるのである。わたしが留学して悟りの境地を得るならば、師の気持ちには背くことになるが、多くの人々を救う機縁をつくことになる。一人の人間の願いのために大事な時間を空しく過ごすことは、仏の心にかなう道ではない。

明全の痛切なる求法の志に道元は深く感銘した。無情迅速の時の流れに生きる陽炎のような命であれば、一刻の猶予もない。臨終の師の願いに心を動かされて、求法の大事を忘れるることは本末転倒である。求法のためには仏も殺し、師をも殺す覚悟がなければならない。そのくらいの激情と熱誠がなければ事は成るはずもない。

この有名な「師殺しのエピソード」は、われわれにはあまりにも激し過ぎるが、それは凡愚のわれわれが未だ時の無情迅速を肌身で知らないからであろう。自己をかけるべき使命を持たないからであろう。

時の流れの速さも、人生の無情も、道元の生きた時代と今も変わることはない。そうだとすれば、この師殺しのエピソードに多少の違和感を覚えるのは、現代人が安穏と惰眠に冒されてしまったからであろうか。

### ——継続と節制は力である——

さて、行動をしたからといって直ちに果実が得られるわけではない。果実を得るために絶え間ない努力と節制が必要である。

何事も優れた仕事をしたいならば絶えず努力し、些細な点についても決して疎かにせず工夫改善の努力をしなければならない。

何事も突如生じることはない。1房の葡萄や1個の無花果いちじくであってもそうである。君がもし「無花果が欲しい」というならば、わたしは君に「そのための時間が必要だ」と答えよう。まず花を咲かせ、実を結ばせ、それから熟れさせるがいい。無花果の実は突如生じることはない。(エピクテトス)

絶えず求めれば何事も得られる。だが、若者は考え違いをして棚からぼた餅の落ちるのを待っている。だが、ぼた餅は決して落ちてこない。求めるものを得るために山をよじ登らなければならない。しっかりした足取りの野心家はみんな目的にたどりついている。これに反し馬鹿者はまるで鷹のように一举にうまい餌を得ようとして、急に思い立ってあちこちをぐるぐると走り回る。こういう連中には何も

期待できない。

社会はみずから求めない人には何も与えない。だが求めるといつてもそれは絶えず継続して求める人に対してだけである。そうでない人は目的にたどりつくことができない。(アラン)

奈良の元興寺系のお坊さんで、唯識仏教の紹介に功績のあった明詮<sup>みょうせん</sup>の修業時代の頃である。ある日外出しようとした時、急に雨が降り出した。ひさしの下で雨が止むのをぼんやりと待っている時、ふと大きな石に気が付いた。雨垂れにいつも打たれているとみえて石に穴があいている。

自分の才能に迷いを抱いていた明詮は、この時ふっと悟った。雨のような最も柔らかいものが、最も堅い石をも穿っている。コツコツと継続すれば雨垂れも石を貫く。至柔が至堅を穿つ。明詮は、この時覚悟を決めた。雨垂れが石をも穿つように、日々倦むことなく励む。そうすれば難しい仏法も理解できないことはない。必要なのは才能よりも倦むことのない堅き志である。

#### 4 失敗を活かす

寒さにふるえた者ほど太陽の暖かさを知る。(ホイットマン)

##### ——成功と失敗の連鎖の中で——

因果の流れは不可思議で、人が取り計らうことはできない。

だから、人間という小さな存在がどのように最善を尽くしても失敗することがある。

人生は、しょせん諸行無常である。何一つ確実なるものはない。すべては時の流れと共に変化する。人生という海原に乗り出した舟人もまた同じである。今日の順風が永遠に続くわけでもない。やがて逆風が吹き始める。だが、その逆風もいつまでも続くわけではない。やがてまた順風の時がくる。このようにして、人生は順風と逆風の入れ代わりが続く。

こう見据えてしまえば、失敗したからといっていたずらに慌てふためくことはない。

だが多くの人は、この逆風が永遠に続くと思い、もがき焦る。そしてますます泥沼に落ち込んでいく。あちこちと走り回り、小細工を弄し、無理をする。潮が満ちてくるのを待つことができない。無理をするから、状況はいよいよ悪化していく。やがて友人や良き知人も離れていく。こうして人は知らず知らずにみずからの手で首を絞めていく。

人生につまずくと、人は往々にして未来が全く失われたように早合点してしまう。捨てばちになり、世をすね、節制と努力を怠ってしまう。そして本当の落後者になってしまう。こうあってはならない。もっと長い目で人生を観て、人生は長い旅であり、ただ生きていくとい

うプロセスが人生そのものだと見切って、失敗を将来の糧としなければならない。

暮の名人さえ、時には格下に負ける。そんな時には自分の体調の持つていき方、作戦の方、敗戦の原因などを詳細に検討して将来の勝利に役立てるだろう。格下に負けたからといって、すぐ引退を考えてはならない。

### ——冬の寒さがなければ桜は咲かない——

人生は、成功と失敗のつづら折りの道を歩む旅なのであるから、失敗したからといって安易に後悔をしてはならない。かえって、失敗を将来のために活かす積極的な態度が必要なのである。

昭和 54 年の種ヶ島は暖冬だった。11 月から翌年 2 月までの平均気温はすべて平年値を上回っていた。だが、サクラの開花は 25 日も遅かった。

暖冬であればサクラの開花も当然早まると思えるのに、実際は逆だった。この現象に気づいた三重大学の研究陣が調べた結果、サクラが開花するにはある期間冬の寒さが必要であることを発見した。

サクラの花芽は 11 月頃までにでき上がって休眠するが、冬の寒さにあって次第に休眠から醒めて、2 月以降に暖かい日が続くといっせいに開花プロセスが動き出す。

常識に反して、暖かいだけの冬は桜には好ましくない。寒い冬があってこそ、桜は見事に花開く。

同じことは人の一生にも当てはまる。失敗という冬の時代を耐え忍び、よく乗り切った者だけが見事な花を咲かせることができる。

ちょうど薄着の子供の方が風邪に対する抵抗力があるように、失敗を経た者こそがより良く人生を生きることができる。

考えてみれば、よく挑戦する人ほど、よく挫折するのである。挑戦しない者は現在の生活に安住し、ぬるま湯のような一生を送るであろう。だから、失敗するのは大いなる挑戦をする者にのみ許された特権だとさえ言える。失敗する者のみが真剣に人生を生きる。人生を思索する。もがき、あがき、苦しむ。そして苦しみの中から、自分流の確固たる哲学を生み出す。

失敗したからといって何も嘆く必要はない。順境をどう生きるかではなく、逆境をどう克服するかにこそ人間の真価がかかっている。逆境になったら逆境を哲学すれば良い。逆境に背中を向けるのではなく、積極的に立ち向かえば良い。逆境は逃げる者には襲いかかるが、既然と立ち向かえば春の淡雪のごとく溶け去ってしまう。

生物にとって「最高条件」と「最適条件」とは違うと言われる。ある生物の集団にとって最高に整った環境のもとでは、その生物集団は最大限に発展するが、この後には必ず急速な衰

退が続く。だから、生物学的にいようと最高の環境条件は不吉である。その生物は必ず衰退するからである。むしろ最高の環境条件の2、3歩手前のやや不十分な環境条件が生物にとっては最も好ましい。ややハングリーな状態こそ生物の最適条件である。

これは個人にとっても同じであろう。人間はハングリー状態にあってこそ、やがて大きく開花する。逆境、苦難にあってこそみずからを鍛えることができる。何もかも達成して満たされてしまうと、もはや衰退があるだけである。

### ——<sup>2</sup>勁き心持て——

人は、浜辺に遊ぶ幼児のようにいつまでも無心に生を楽しめるわけではない。実社会にてて経験を積み、年齢を重ねるに従って世間での有用性も高まっていく。それに従って、次第に人生の苛酷さに気づくようになる。

平社員から中堅社員になり、管理職になり、取締役、さらに専務、副社長と昇りつめるに従って、昨日の友は去り、ライバルとの競争はますます激しく、責任は耐えがたいほど重くなっている。

一見安穏に見えるこの世界も、その実相は苛酷な耐久レースなのである。世の中は、人ととの絶え間なき闘いである。だから年齢を重ねるに従って、われわれは世の中を捉え直さなければならない。

この現世を「非常酷薄」、「弱肉強食」の世界と捉え直し、それに応じた勁い心を持って対応しなければならない。

20代、30代、われわれはまだ社会の苛酷さを知らない。むやみやたらと人生に体当たりし、笑い、泣き、挫折するが、体力もあり、やり直しもきき、責任も重くない。まだ気楽な時代である。

40代、50代の20年間に、初めて社会の苛酷さを肌身で知るようになる。昨日の友は敵となり、肉親の死にあい、家族を養う責任も重く、ビジネスの競争もいよいよ苛烈である。みずからの精神を鼓舞するものの、体力は続かず、ライバルとの目に見えぬ闘いにストレスはたまる一方である。そういううち成人病の1つや2つに罹ってしまう。

さらに60歳を過ぎると、人生の苛酷さに直接身をさらすようになる。親しき友達の何人かは死に、すべての事柄は哀調の調べを帯びてくる。人生の頂上期は過ぎ去り、とぼとぼと下り坂を歩む自分に気が付く。行きつく先は真暗だ。今日は良くない。これからも1日ごとにいよいよ悪くなっていく。人生は暗く、寂しく、厳しい。この老軀を無情の風が吹き抜けていく…。

死は忍び足でやってくるから、よほど注意しないとわれわれは人生という舞台の幕が変わったことに気が付かない。第1幕から第2幕へ、第2幕から第3幕へと舞台の幕は変わっているのに、われわれは何の心構えもなく次の舞台に臨んでしまう。

人生は虎の牙を持っている。幕が変わることに、人生はその牙をむき出しにする。この苛酷な人生の無情に対応する手段はただ1つ、人生の幕が変わる前に勁い心で楯を作り、虎の牙から身を護ることである。

人は不意打ちには耐えられなくても、心の準備が整っていれば苦難や逆境に耐えられる。実社会での苛烈な競争と人生の無情に耐えるため、われわれは勁い心を養わなければならない。

そのためにも行動しなければならない。行動すれば成功のチャンスも大きいし、たとえ失敗しても、それを糧として勁い心を養うことができる。ちょうどウエイト・トレーニングで筋肉に負荷を与えて筋肉の増強を計るように、失敗という負荷が勁き心を養う。

勁き心を獲得した者こそ人生の勝利者である。なぜなら、地位や名誉やお金といった外部の装飾物は失うこともあり、奪われることもある。だが、勁き心は何人も奪うことができない。行動の目的は成功することではない。行動の目的は行動を通じてみずからを鍛え、苦難に負けない勁い心を培うことにある。だから、失敗に学び失敗を活かす気構えさえあれば、行動する者こそ人生により良く適応するのである。